

府立箕面支援学校 「学校協議会」 報告書（第2回）

日 時	平成26年12月5日（金） 10:00～12:00			
出席者	協議会委員	職名等	学校事務局	校務分掌等
	藤江 康彦	東京大学大学院准教授	大角 正弘	校長
	兼平 高子	大阪府池田子ども家庭センター心理総括主査	早野 眞美	教頭
	阿久根 賢一	社会福祉法人福祥福祉会理事	伊藤 倫隆	教頭
	岡本 民江	吹田市立わかたけ園長	山崎 静一	事務長
	村田 文代	平成25年度本校PTA副会長	坂田 隆志	首席、事務局長
			西森 勢記	首席、自立活動部長
	(欠席者)		植野 耕司	首席、コーディネーター
	吉田 和史	箕面市立萱野東小学校区「青少年を守る会」会長	松本 泰輔	首席、高等部主事
			大竹 敦久	中学部主事
			川村 朋子	小学部主事
おもなテーマ	学校経営計画に基づく主な取り組み			
協議内容の概略	1 学校長挨拶 2 学校経営計画に基づく主な取り組み ●キャリアプランニング・マトリックス（キャリア教育の推進） ●自立活動ADS（特色ある指導体制） ●組織運営PT（効率的な組織運営） ●ユニット制（授業力向上と授業改善） 3 上記取り組みに対する質疑応答、提言等 4 事務局より諸連絡			

質疑応答 ・ 提言等	学校経営計画に基づく主な取り組み ●キャリアプランニング・マトリックス（キャリア教育の推進） <事務局A> - 生活年齢の概念、生活年齢による接し方等が反映されるような考え方は入れるのか。 →ゆくゆくはそうしてほしい。ただ、「このように授業をしてください」というものではなく、参考にしていただくというものである。 <事務局B> 【解説シートに関して】 高等部の生徒全員が高等部の欄に書かれてあるものをめざすということか。高等部の生徒の実態はさまざまで、小学部から在籍している生徒もいれば、高等部からの生徒もいる。必ずしも全員が目標どおりステップアップするわけではなく、目標にも幅がある。 →小学部、中学部、高等部ではなく、もう少し大きな括りとして第1段階、第2段階、という活用も考えられる。 →高等部には普通課程、生活課程があり、一つの目標で全員に当てはまるわけではない。しかし、内容が難しいからしないというわけではなく、高等部の生徒なら高等部の内容を、形を変えて近いものを経験していく、と考えている。 →本校では十分にキャリア教育が周知・理解できているとは言えない。現在は最初の段階であり、今後積み上げていきたい。今回のものが完成でなく、見直しは必要である。 <A委員> - 個人によって目標は変わってくる。 - キャリア教育をどのように教員間に周知していくのか。 →まずは職員会議で検討する。夏にも研修をしたが、まだ周知できていない。授業改善、教員の意識改革に繋げたい。現在、小学部、中学部、高等部と指導が切れてしまっているが、子どもの12年間を見る、継続した指導という意識を持っていきたい。作ることに専念しているが、今後どう周知していくかが課題である。 - 教員の意識改革大切。小学部入学から12年間子どもを見るという意識が重要である。 - キャリア教育プランニング・マトリックスには生徒一人一人に合わせて使う「目標」、発達の状況を把握する「アセスメント」、先生の授業の振り返りの「チェックリスト」の3つの機能を持っている。どのように使うのが重要である。そして、研修をすることも必要である。 <B委員> - 子どもに合わせたステージ、合わせた指導、伝え方が必要。子どもへのアセスメントのツールとしての意味合いはあるのか。 →現時点ではアセスメントはない。将来的に授業改善のツールとして教員の意識改善に繋げていきたい。 →最終的には個別の教育支援計画へ繋げていきたい。 <C委員> - どう評価していくことができるかを考えることが必要である。みんな身につけないといけない力だと思う。 <D委員>
---------------------------------	--

質疑応答 ・ 提言等	・ 教員向けの研修は毎年するのか。 →今年の夏に行った。毎年必要と考えている。 ・ 重度の子どもの保護者は、健康で快適に過ごすことができるか等、生活をしっかり見てもらうことに重きを置く。教員力、授業力以外のことも話し合ってほしい。そういった、教員の「土台となる力」も周知してほしい。 →キャリア教育PTでは、ライフキャリアとしても考えている。コミュニケーションの力などの社会生活を送るために大事な力をはじめ、どのような力を伸ばしていくかを話し合うことも大切である。 < E 委員 > ・ 意思をどう伝えるかなどコミュニケーション力を育てることは大きな課題である。 ● 自立活動 A D S （特色ある指導体制） < A 委員 > ・ A D S とはこういった位置づけか。 →小学部に所属しているが、小中高バランスよく見ている。 →授業も担当するが、基本的には A D S の仕事を中心となっている。授業担当時間は、かなり少ない。 ・ アドバイスをする際、自分が見本となり、指導しているところをビデオに撮るのか。 →授業の実践面と評価面で見る側に理解しやすいようにという観点でビデオに撮っている。 ・ 実際にアドバイスを受けた教員の反応は。 →役に立ったという評価をもらった。 ・ 面白い取り組みだ。自分がやっていることをオンタイムで評価することは有効である。視覚化して伝えることは良い手法である。 →振り返りは大事である。ただ、ビデオを見ている教員が少ない。 → P T、S T、O T など、専門家がアドバイスしてくれる制度は年に数回あるが、単発で継続できない。A D S は校内にいたので、いつでも振り返りができ、アドバイスをもらえる。 < C 委員 > ・ 教員と A D S とは課題の共有はできているのか。 →個々の教員と課題が共有できているかという点と難しい。統一した制度はできておらず、その時一度きりのアドバイスになってしまう場合もある。 ・ 専門性の低下と説明にあるが、専門性とは何か。 →「自立活動」とはどういうものか、支援教育とは何かがわからない人がいる。支援教育というベースがあって、支援学校に適した授業が行える。 ・ 支援教育のあり方は、現場にゆだねられている部分が多い。 < A 委員 > ・ 巡回頻度はどれくらいか。 →教員、児童生徒、A D S のニーズによって変わる。変化を見るという点で2回見るのが最低ラインだと考えている。多角的な観点から見るということで A D S の数を
---------------------------------	---

質疑応答 ・ 提言等	増やしていきたい。 ・単に人数を増やすのではなく多角的な観点を持つためにA D Sを増やすことが大事。 ●組織運営P T（効率的な組織運営） < D 委員 > ・教員の会議の内容は。 →子どもたちの話しをする機会として、クラス会議は毎日バス発後に行っている。学年会、学部会は月に2回ずつ行い、その他グループ会議などもある。これらの会議は、子どもの話しをする時間、会議ではなく「子どもと関わる時間」と考えている。 ・自分の子どものことは担任以外の先生にも知ってもらいたい。 →「子どもの話をする時間」は、教員間で少ないと思っている人がいる。子どものこと以外の話をしている会議を減らしたい。 < A 委員 > ・他校と比べてどうか。 →他校から異動してきた教員の中には、今まで全く違う分掌、委員会に所属していたが、仕事が一本化してよかったという意見もあった。取り組みは功を奏しているが、様々な意見を聞いてマイナーチェンジしていく必要がある。 →行事中心になり、授業が継続的に実施できていないという一面もある。授業をどう継続的に積み上げていくか。運動会、もみじフェスタなどの行事の実施学期を分散することや泊行事の見直しなど、今までやってきたことの取捨選択が大事である。 < 事務局 B > ・多忙感を感じている。面白いことをしていたら多忙感は感じない。モチベーションの低下が蔓延しているのを感じる。 < C 委員 > ・多忙感の解消は難しいが、充実感を得られる仕事があればよいが・・・ < D 委員 > ・多忙感は心の持ち方を変えると充実感になるはずである。 ・会議はやること自体が目的になっているところがある。前回何をしたのか確認して始めるようにしている。会議の目的を確認することが重要である。 ・前例にとらわれるのではなく、改革の視点を持って会議に臨むべきである。 ・子どもたちと向き合う時間が増えたらどうなるのかも検証していくことが必要である。 < C 委員 > ・教員の働く場としてどういう環境を作っていくかも考えなくてはならない。 ●ユニット制（授業力向上と授業改善） < A 委員 > ・研修を受ける「新任1年目」の定義は何か。一般校からの異動の教員は対象にならないのか。 →新規採用1年目の教員。転任、非常勤の教員は対象になっていない。新転任全員対象の研修は行っている。 →新転任の教員も、このシステムに乗ると良い。一般校からの転任は全くの新任とい
---------------------------------	--

うわけではないが、特別支援教育の専門性向上を考える場合、大きな課題である。

< A 委員 >

- ・地域の支援学級などでは専門性のない先生が担当していることもあると聞いている。
学校によって担当者の経験が違う。
→支援学校のリーディングスタッフが地域支援のために小中学校等を巡回し、教員の特別支援教育の専門性向上をサポートしている。

< C 委員 >

- ・ベテラン教員からのアドバイスだけでなく、若手の教員からのアプローチもあり、知識を共有することが良い教員文化を作っていくことになる。
- ・校内研修報告に、授業者の振り返りコメントも載せると良い。
→コメント、アドバイス等も伝えるよう考えている。
- ・初任者が研修を行っていくシステムを作ることが重要である。